砂漠の幻影

ある午後
ひとりの男が
岩山に座って
目の前の
砂漠を見ていた

不毛の大地
荒野
ここには
なにもない
ただ
砂　砂
砂ばかり

そのとき
鳥が一羽
太陽を
よぎり
影が
大地の
上を
すべって
いった

その
影を追って
たちまちのうちに
緑の下草が
大地をおおった

男の知らない
多くの樹木が
天をつくほどに
次つぎと
育っていった

木は　切り
たおされ
その後に
男の
見たこともない
人びとが現れ
家を造った

家は
たちまち
増殖して
密集した

かつての
森のように
巨大にそして
天をつくほどに

だが
一瞬にして
くずれおちた

《おわり》 グレープフルーツ 1984年19号に掲載